セミナリオ

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セミナリオ

【Ｎコード】

Ｎ５１６２Ｚ

【作者名】

白神

【あらすじ】

主人公・子無舞久は神軍に徴兵されそうになるが幼馴染みのおかげで徴兵は免れる。だが舞久は抵抗するために幼馴染みと融合し女になってしまう。元に戻るための方法を探すため子無舞という名で京都にある神軍に対抗する者達を育成する魔法学校に転校する。神に抗う一人の少年の物語―

神からの挑戦状（前書き）

初めてなのでよろしくお願いします。

神からの挑戦状

神は人間に能力を与える。それは特定ではなく、平等に与えられる。
だが歳をとるにつれて
その能力は弱小化し消える
だがその能力をとどめる者も存在しその者達は一様に苗字に「神」
の言がある

その者達は自分では能力の存在を認識できない。
そして彼らは１５歳になった時
神に神軍に招集されて
死ぬまで戦う運命を背負う
つまり神は人間に能力を与え熟すと神軍に誘う

だが神も猶予を与える

ある挑戦状を送り付ける

それに勝てば招集は拒否される。
そして能力も変わりなく
存在する
ところが勝利したものはいない
彼が現れるまでは…

さてこれから始まるのは
神の挑戦に打ち勝ち、神に仇なした少年の物語ー

――――――

９時２０分　７月

蝉が縦横無尽に鳴き喚いている
松尾芭蕉の俳句にも蝉について詩ってたなと思ったが今は関係ない。

今の俺には不快でしかないなぜなら来たからだ
手紙が

学校に行ったら靴箱に手紙が入ってて女の子からのラブレターかなと思ったら魔王からだったみたいな
そんな感じ

そして学校から出て
手紙を確認する

書かれていたことは

「手紙を受け取ったと同時に1時間の猶予を与える。当事者は時間内に世界で一人だけ当事者を覚えてくれる人物を探す。
もし見つけることができれば生き残り、できなければあなたを狩りに行きます。幸運を。」

いたずらだと思ったが
念の為だ
友達に電話しようと携帯をだし電話した。

だけど
「誰？」と冷徹にことごとく言われた

もちろん電話帳にあるやつ全員に電話した。
でも全員出なかった。
たぶん全員の携帯に俺の連絡先はないだろう。
だからみんな知らない電話番号からだから出なかったんだ
「母さんと父さんなら…」
そう思ったが
母さんと父さんはもう死んでいる。
俺が6歳の時に交通事故でだ
それに双方のじいちゃんとばあちゃんも死んでる。
だから俺は
「世界で一人か」
絶望した
泣きそうだ。
その時俺の頭の横を蝉が
通り抜けた。
俺は反射的に頭を上げた。
「綺麗だな」
今俺がいるのは丘の上
ここから眺める景色は
本当に綺麗だ。

それに今は夏で入道雲が
厳かに浮いている。

「この景色もこれで見納めか…」
どうせ俺は世界で一人と俺が人生最大の憂鬱を迎えた時

「……ま……会おう……」
脳の中で声が響いた
そして映像が流れる。
今俺がいる同じ丘で黒髪ロングの少女が囁いている。容姿端麗の少女は笑いながらでも切なそうに…
と、そこで我に返った。

「なんだ?今の…」
おかしい気分だ。全然知らないと認識できればいいのに俺は知ってる。
名前も思い出せない
でも…
彼女なら俺を憶えているかもしれないと思ったが
俺が忘れてるんだ
憶えているはずないじゃないか

「はあ　俺本当に独りだ…」

「み〜つけた。」
陽気な声が聞こえ、後ろを振り向く。

そこには、黒と白を基調とした制服のようなものを着た髪をツインテールに束ねた少女が立っていた
俺と同じくらいの歳だ

「まさか…」

見覚えはないが俺のことを憶えているのかと期待したが悉く崩される。

少女は鎌を持っていた

そして

「あなたを狩りに来ました♪」

人生の終了を告げる悪魔が立っていた。

神からの挑戦状（後書き）

ちょっと変なところで終わりましたが区切りが良かったので終わりました。
主人公の名前は次回判明します。
次回もよろしくお願いします。

最初の抵抗（前書き）

読んでいただければ幸いです。

最初の抵抗

ツインの少女が宣告して3分くらいが経った。
俺は我に返り言葉を紡いだ。
「嘘だろ…だって時間は！」
「もう時間は経ちましたよ。きずかなかったの？悠長ですね～～」
くそっ俺が鬱期に入ってるうちに時間が経ってたのか
でもどうせ無理だったし、悔しがっても仕方ないか。すると俺の気分とは対称的な声で少女が、
「じゃあ狩らせていただきます。」
と言い、ゆっくりと俺の所に歩いてきた。

――――――――

同時刻

丘を登る道を黒髪ロングの大和撫子を彷彿とさせる少女が走っている。
かなり急な坂をもはや人間の成せる速度を超越した早さで走っている。

徐々に進んでいくと、遠くに2人の人物を把握することができた。
1人は男でもう1人は鎌を持った少女。少女はゆっくりと男に近づいている。少女はその異質な光景をみても動じない。そして彼女は少し安堵した表情を見せたがすぐに真剣な表情に戻る。
「……舞久……」
速度を更に上げ、走って行った。

――――――――

ツインの少女は、男の前に立ち
「私の名を言っておきます。私は、エルン・ディライト以後おみしりおきを」
「俺の名前は…」
礼儀だと思い名前を言おうとしたがエルンに止められる。」

「知ってる～子無舞久でしょ～なんで苗字に神の言がないのに神軍に招集されるのか知らないけど」

「は？神軍って…」
俺は聞こうとしたがエルンは不敵に笑い
「これも仕事ですから♪」その言葉と同時に
鎌が振り下ろされる。
目をつぶった。そして
ジシッ
鈍い音が鳴り静寂が訪れ、俺は目の前を見て驚愕した
長い黒髪をなびかせ俺と同じ制服を着た少女が立っていた。
少女は俺の方に向き
優しく微笑んで、
「久しぶり　舞久、また、会えたね」
その笑顔を見て
すべてを思い出した。その黒髪少女のことを

――――――――
俺には幼馴染みがいた。
だけど幼馴染みは俺達が中学に上がると同時に引っ越しした。
その引っ越し前日に俺達は丘の上で話していた。

「もう会えないね。ここは東京で私は九州にいくしさ」

「そんなことないだろ。どうせ日本にいるんだからさ」
「うん、そうだね。会おうと思えば会えるよね。
舞久が来てよね。待ってるから」

「ああ、なんならジェット機で会いに行ってやるよ。」
「うん、またいつか会おうね。」
幼馴染みは嬉しそうに楽しそうにだけど泣きながらいった。

――――――――
光速のように記憶が蘇る。俺には幼馴染みがいた。
それがこの黒髪少女だ。
名前は…
「……守（まもり）……」そう幼馴染みの名前は
神瀬川　守
「お前まさか…」
「そう、私は神軍に招集された。でも舞久も招集されるのを知って助けに来たの。」「な…」
マジかよ…守も
「へ～そうか。帰世権を使ってこの世界に来たんだ。でも、あれは1回だけしか使えないのに」
「それでも、舞久を助けたかった。」
「だけど、いままさに神軍に招集される者を助ける、まあ、阻止すれば罪になる」
「ええ、わかってるっけど」守はエルンを蹴り、エルンは避け、後ろに跳んだ。
守の手には、鎌を防いだこと傷ができていて血が出ていた。
エルンが若干叫びながら
「それでどうするの！♪
私と…」
「戦うわ」

守が冷静に言う。
「舞久と二人でね。」
俺は、即座に意義する。
「ちょっと、守！
何言ってんだ！あんな鎌持った奴に勝てるわけないだろ！」
「今の舞久ならね。でも」守は、俺に手を差し出す。「私の能力があれば、行ける。私を…信じて」
俺が迷う暇はない
もうこれしか方法がない。「分かった。守が言うんだからな。」「ありがとう。じゃあ手を握って」

そして手を握った。
瞬時に空間が歪み、電流が走る。だがすぐに収まり煙が立ち込める。

「な…」
エルンは驚愕の色を隠せない。

「俺は、さっき生きることを諦めたが、前言撤回だ。神軍がなんだ？んなもん
潰してやる。」

そこには、刀を持った白髪の美少女が立っていた。

最初の抵抗（後書き）

マンガで例えるとまだ1話もいってない。ヤバイ

女になった男（前書き）

ご感想お願いします。

女になった男

日本刀を持った白髪の少女が口火を切った。
「なんで女になってんの？」白髪の少女＝舞久みたいな少女の体は当然女らしい体だが
「胸に膨らみがあるし、なにより、勲章が、俺の男である存在証明が…」
『ないね。』心の中で守の遠慮がちな声が聞こえる。
「まさか、嘘でしょ？融合するなんて…」
エルンが驚愕している。

「勲章が…俺の…」
「融合すれば、必然的に能力の高い者の特徴が繁栄される。だからあなたはいま女の子の姿ってわけよ。」「そういうことか。原因を知れて良かった。」
『立ち直ったか』
「まあ、今は目の前のこと集中するか」
舞久は刀を強く握り、体勢を低くする。
「私に勝てるかな？」
エルンは腕時計をさりげなく確認し、戦闘態勢に入る。
『守、この刀は卍か…』『無理』
「だよな、じゃあ戦るか」「後悔しないでね～」
そして、同時に土を蹴り
キィン
刀と鎌が衝突し、
「意外に速いね～」
「俺も驚いてるよ」
『確かに身体能力、反射神経は格段に上昇している。だけど、まだ…』

「だけど、まだまだだね。刀も振るったことがないのに意気がってんじゃねえよ」「な…」
エルンは鎌で連続的に切り掛かる。舞久は防戦一方で押されていく。
「私は！お前みたいな目をしてる奴が！嫌いなんだ！反吐が出る！」
舞久は防御しながら、確実に押されているが、あきらめてはいない。
舞久の目は言うなれば、青空の如く、全く淀んでいない目でエルンを見据えている。
「私は！「うるせえ」
鎌を最大限に振りかぶったエルンを舞久が言葉で制した。
「うあ……」「隙あり」
比較的美少女な容姿をしている少女が男勝りな言葉を吐いたことでエルンは硬直してしまった。
舞久はそこを見逃さずに
刀を斬り付けた。
ザァン
「ぐはあっ　く…そ…」
血が溢れ、エルンは倒れ伏す。
「はあ…はあ…勝った」
『本当に勝ったんだ！』

「はあ…もう時間だよ」
エルンがそう呟くとエルンの元に魔法陣が形成されエルンは魔法陣に沈んでいく
「これで勝ったと思ったらダメだよ、はあ…あなた達のことは全ての神に知れ渡る。覚悟しときなさい」
そして、エルンは魔法陣に沈んだ。
蝉の鳴き声が耳に入ってくる。それで今が夏ということ思い出した。
「あっつう、汗だくだ～
……まあとりあえず終わったな」

そう言いながら町の景色を眺める。
『やっぱり綺麗だな～いつ見ても…本当にきれい』
今までに見た中で一番綺麗かもしれない。

「さてとそろそろ元に戻ろうぜ、疲れたし寝たいんだよ」
『ああ～それなんだけど～』と守が口籠もる。
「なんだよ、早く戻ろ…『戻れないんだ』え？！」
戻れないってことは女の姿で暮らすということに…

「ぐあああああああ！
俺の男の勲、チ〇コは元に戻らないのか！」
『ちょっ普通にそんなこと言わないでよ！変態』
守の言葉に激怒したのか目を最大限に開け、「女には分からないだろうなあ！あれを亡くすということは一流企業の社長が突然ニートになるぐらいの絶望なんだよ」と叫んだ。

『うう～～、ちゃんと元に戻る方法を考えるから』
「え、戻れんの？それを先に言えよ」舞久は安堵した。
『でも、この町からは、離れないといけないけど…』「ああ、分かってる。」

『じゃあ、帰ろう。』
そして、舞久は歩きだした依然と蝉が鳴き、入道雲が浮いていて典型的な夏のイメージを具現している。
「うるせえな、蝉は」
だが今は、蝉の声を不快には思わなかった。

女になった男（後書き）

やっと漫画でいうと1話が終りました。これからもっとまとめられるように頑張りたいと思います。これからもよろしくお願いします。

子無舞というキャラ作り（前書き）

感想お願いします

子無舞というキャラ作り

俺の男の勲章がなくなり
１日が経った。
昨日疲れすぎて家に帰ってベッドにインした。
おかげで汗臭い。なので
風呂に入ろうとした。
だがそこで俺は自分の体が女であることを思い出した。
最初は戸惑った。そりゃ俺も一応理性がある。
そんな変態的行為には決して走らない。俺を甘く見るな。だが風呂に入りたいという欲望は止まらない。
そこで俺は決断した。

「そうだ。風呂に入ろう。」
『ダメ～～～～～～～～』そこで俺の意識が途絶えた
――――――――――――

目が覚めたら、眠っていただがさっきとは、明らかに違うのは体からすごいいい匂いがした。
『起きた？』「ああ、それよりお前が体洗ったのか？」『そうだよ！舞が変態の架け橋を昇ろうとしたから』「俺は変態じゃないしそれに舞って呼ぶな。まじで女じゃないか」
『何言ってんの？今日から舞久は子無舞として生活するんだよ』
「へ～すげー頑張ってね」『舞ちゃんはこれから神と闘うために訓練する学校に通うからね。』
何言ってんの？この子　医者も逃げ出すレベルだよ

『現実逃避しても無駄、そこには、元に戻る方法があるかもしんないのになあ～』
「守様いえ女王我に何なりと」

『あなたには学校に通う前にある特訓をしてもらうわ』

『女の子のお話練習〜♪』

――――――――

鏡の前に立っているのは

白髪の美少女　子無舞

「さてお前が好む女のイメージは？」

『う〜ん、舞が好きなのでいいよ』

じゃあまずは、上から目線のポーズをとり

「別にあんたのために作ったんじゃないんだからね」『何で、ツンデレなの。わたしそんなのいや』

う〜ん、じゃあ

「お風呂にする？ご飯にする？それともわ・た・し」『いやだ。もっと清楚な感じがいい』

じゃあ、

「あなた達、早く登校しなさい。」

『う〜ん、まあまあね。』生徒会長みたいな感じか…

「では、このような話し方でいいのですか？」

『うん、そんな感じ

やればできるじゃない！』

そして子無舞のキャラができあがった。

だが舞久は分かった。

というか自覚した。

「俺は変態なんだ。現在進行形で変態ｉｎｇしてる。」『それは前から』

誰か打開策があるなら

俺に教えてくれ！

子無舞というキャラ作り（後書き）

次回セミナリオの意味が判明　ヒントはフランシスコ・ザビエル
日本史ができる人ならわかるでしょう。
それではこれからもお願いします

そうだ。京都に行こう（前書き）

学園編が始まります。

そうだ。京都に行こう

現在俺は京都に行くために電車に乗っている。
なぜ電車に乗っているのかそれは、学校が京都にあるからだ。その学校名はセミナリオ、日本語で神学校という。セミナリオでは魔法は必修科目らしい。まあ普通に国語や数学等の教科も勉強する。そして、やはりランク付けがなされている。能力値をランクに表し、クラス分けするんだろう。セミナリオの概要は分かったし後は学校に着いてからにいろいろ聞くか。
それより、今日早く起きてまだ眠いし京都に着くまで寝ておこう。

――――――――――――

京都

「やっと着いたな。修学旅行ぶりか」
『京都タワーだ。東京タワーよりはちっさいね』
京都タワーが小さいのは、京都の景観を損わないようにするために景観法が作られたから小さいんだ。
『ほ～う、そういうこと、まあ神社とか寺がいっぱいあるからね。』
余談している間に京都駅のバスターミナルでバスに乗り、かの有名な平安神宮に行った。平安神宮には赤い鳥居がある。その鳥居がセミナリオの門らしい。

バスに数十分経ち、平安神宮の赤い鳥居の前のバス停に着き、バスから降りる。
「これがセミナリオの門」『舞行こう』

そして、半信半疑ながらも鳥居をくぐった。
すると、さっきまで日本風の景色が広がっていたのに目の前には、

ヨーロッパ風の景色が広がっている。正面にすごいでかい建物がある。多分あれが学校だろう周りにもいくつかの建物があり、人が出入りしている『まずは、職員室に行きましょ』「そうだな」
『ダメ、ここでは、もう女言葉よ』
「ごめんなさい。気を付けるわ」
そして、学校に入る。
（学校に入るまでに通りすがりの人達にチラチラ見られた）正門の受付で転校生という証明証をもらい、
「職員室に行って担当になる先生に証明証を渡して下さい」と受付の女の人が言った。「はい、分かりました」「では、学校にお入りください」そして、学校に入り案内板を見て職員室に向かった。
すると、職員室の前の椅子に女の人が座っていた。
黒髪でスーツを着ている。女の人は、こちらを向き、「子無舞、日本人、能力値は、これは驚いた。ＫＩＮＧか」ここで説明、能力値は５つにわかれ、ＴＥＮＴＨ　ＪＡＣＫ　ＱＵＥＥＮ　ＫＩＮＧＡＣＥと名付けられている。そして俺は、ＫＩＮＧか。
「はじめまして。お前の担任の神野麗だ。よろしく」「あ、はいよろしくお願いします」
神野（かみや）先生はそういうと
キーンコーンカーン
鐘が鳴り、「おっと、早く行こう。生徒達が待ってる」と言って歩きだし、エレベーターに乗った。
エレベーターの中では無言重い空気が流れたがふと、疑問に思った。
「あの先生、どうやってわたくしの能力値を測ったんですか？」
「ん、受付のところでだが」あそこか…「まあ証明証が能力値を判定する」と言って俺から証明証を取り掲げた。そこには、ＫＩＮＧと書かれていた。
エレベーターから降り廊下を歩き、教室の前を通過する。７組　６組　５組の前に立ち止まった。

「ここがお前のクラスだ、私が入れと言ったら、入ってこい」と言いながら
ドアを開けて、
「席に付け～……ええっと今日は転校生が来ている。まあまあ特殊なやつだがな」おい聞こえてるぞ、特殊ってなんだ。
「入れ」
俺は深呼吸し・ドアを開けた。クラスは３０人くらいいる。クラス全員がこっちを向き、少し戸惑うが今俺は子無舞、こんなことでひるまない。そのまま、教壇に立ち、自己紹介した。

「わたくしの名は子無舞です。趣味はアニメ鑑賞とスポーツ　能力値はＫＩＮＧよ！」
クラス全員が驚愕していた。

「もしかしてまちがった？」『スリーアウト、チェンジ』守の呆れた声が俺の心を侵食した。

特殊な転校生（前書き）

人物の名前を決めるのは難しい

特殊な転校生

男は完全に間違ったと思った。誰がどう見てもこの殺伐とした光景をみればそう思う。そして俺がもう1回教室に入る所からやり直そうと決意した時
一番後ろにいるオレンジの髪の陽気そうな男が
「子無って苗字に神の言がねえじゃねえか」
どうやら、俺の苗字に驚愕していたようだ。
確かに能力を引き継げるのは必ず苗字に神の言があるものだけだ。
つまり、俺の存在は今までの常識を覆すことになる。

「だから、言っただろう。特殊だと」「いや…でも」と一番前の席にいるクリーム色の髪をポニーテールに束ねた女子が何か言おうとしたが「では、子無はあそこの真ん中の席に座れ」と言われ俺は席に着席した。
「じゃあ、お前ら仲良くしろよ。そして切磋琢磨しろ。」と言って先生は教室を後にする。それと同時に一斉に俺の席に１０人くらいの女子が集まった。

「子無さんて神の言がないのにＫＩＮＧクラスってすごいね」「そんなことないよ、あと舞でいいよ」よし、これで親近感を持ってもらえる。「でも子無って苗字珍しいね」「白髪なんて初めてみるよ」と矢継ぎ早に質問され、疲れた。

少し落ち着くと
２人の男子が近寄って来た。「よう、俺神民滝人っていうんだ。ランクはＫＩＮＧだ」とさっきのオレンジ髪の陽気そうな男が言い「そして僕が神東時彦（かんどう）だ。ランクは同様にＫＩＮＧよろしく」と眼鏡を掛け博識そうな雰囲気を醸し出しながら言った。

「よろしくですわ」
と言ったがふとなんでわざわざ女子に自己紹介してくるんだ？と思ったがすぐに理由が判明した。
「僕はクラスの代表でね。先生に学校を案内してやってくれたと頼まれたんだ」と時彦がめんどくさそうに言い「それで俺が副代表なんだ」と滝人が笑いながら言った。
「それで昼休みに学校を案内するから覚えておいてくれ」と時彦が眼鏡の位置を直しながら言った時
「私達も行く～」と言いながら3人の女子が近づいてきた。
一人はさっきのクリーム色の髪をポニーテールに束ねた子、そして背が低く少し童顔のピンクの髪をおさげにしている子に制服じゃなくてコスプレの服を着ている銀髪の子がやって来て
上の順に自己紹介して行く
「私は神茂空理（かみもくうり）です。ランクはQUEENです」と空理が言い
「そして私が鳴神社（なるかみやしろ）。ランクはなんとACEなのだ」と小さい胸を張りながら言い「最後に我が九神夜音（ここのかみやいん）だ。ランクはKING」と自己紹介が終り、空理が遠慮がちに
「私達も一緒に良いですか？」と時彦に聞き「女子がいた方が安心だ」と承諾した。

そのあとはとりとめのない話しをして授業開始のチャイムが鳴った。

――――――――――――

通常授業（国語や数学等）はまだ大丈夫だったが
魔法が意味不明

魔法にはジャンルがあり
攻撃魔法　防御魔法　回復魔法　環境魔法　移動魔法そして拘束魔法がある。
もっと細かく分類されるがこれが大幅なジャンル分けだ。今日の授

業では攻撃魔法の基礎知識を勉強していたが開始5分で現実逃避した。

――――――

昼休み

学校を案内してもらい今は闘技場にいる。

そして俺は初めて闘技場を見ていたから興奮していた「すごいわ！こんなの初めて見た」「そうか？そんなに驚くことでもないだろう」と時彦が若干引きながら言った。すると、社が
「じゃあそろそろはじめまよう！」といい闘技場から出ていく。他の皆も出ていく中で時彦が「子無お前は残れ」と少し真剣な表情で言った。

「えっといまから何を？」と舞が聞いた。
そして時彦が
「召喚　承認」といい
両手にハンドガンを握り、銃口を俺に向け、
「力試しだ」
時彦は引き金を引いた。

誇りを胸に（前書き）

お読みください

誇りを胸に

ドオン

時彦の射撃した銃弾が舞の後ろで爆発した。

「ほおう、避けたか、少し移動魔法で弾の速度を上昇させたんだがな」時彦が弾を装填させながら言った。「いきなり何をするんですか？」「クラス代表にはある権利が与えられる。それは交戦権だ。代表は双方の同意を得ずとも交戦できる。だがそれには理由が必要なんだ」と銃を指でまわしながら話し続ける。

「理由は　何？」

時彦は笑いながら

「お前が本当にＫＩＮＧクラスか確かめるためだ。」

くそっめんどくさいな

『でも、あれじゃ引き下がらないよ』

戦うしかないか

守、武器貸してくれ

『はいは～い、じゃあ

刀　出すね』

「いいわよ、戦うわ」

そして、魔方陣が出現し刀が現れる。

「日本刀か…てっきり槍とかだと思ったが」と時彦がいい同時に銃口が再び舞に向けられる。

「さてハンデはなしだ。お前が魔法を使えなくとも、全力で行くぞ。まあ、１０秒で終わるがな」

「ん…来なさい」

―――――――――
観客席

そこで滝人　空理　社　夜音が眺めていた。
すると、社が
「舞が負けるね。絶対に」そして　滝人が
「ああ、そうだな　例え同じＫＩＮＧクラスでも魔法の扱い方で変わっていく」
「例えるなら、どれほど性能のいいＰＣを持っていてもＰＣの基本技術がなければ
意味がない」と夜音が頷きながら言う。「そうだね。でも、どうかな…」と空理が言う。

「まあ舞が負けるのは確定だけど、どれだけ持ち堪えられるかな～」
と社が怪しげに微笑んだ。

―――――――――
闘技場

「では、戦闘を…」
時彦がトリガーに指をかけ舞は態勢を低くする。
そして
「開始する」
時彦の開始の言葉とともに時彦がトリガーを引く
「避けられるかな」
「な…」
ドゥァァ
さっきの魔法弾の５倍の速度と威力で舞に突撃した。
「さっき、お前と会話している間銃を指で回転してただろう。あれは、癖でもなんでもない。あの時に移動魔法と攻撃魔法をかけた。

まあ、気付かなくて当然だ。魔方陣を形成させず魔法を発動したからな。避けるのは難しいだろいな」
時彦は魔法の技術では上位にいる。魔方陣を形成せずに魔法を撃つことはサッカーでいうとゴールキーパーが相手ゴールにシュートを入れるぐらいに難易度が高い。

「うるさいわね…女の子に手加減できないの」
頭から血を流しながら言った。その光景に時彦は一瞬動揺したが笑いながら
「防御魔法なしで防ぐとは末恐ろしいが、勝負は決した。僕の勝ちだ。」と言い銃をしまおうとするが、

「まだ…はあ…終わって…ない！」舞は、刀を強く握る。『舞！ダメだよ！無理しないで、魔法が使えないんだったら仕方ないよ！」悪いな守、男には譲れない誇りが、あるんだ。

「まだ戦う気か…まあその覚悟だけは評価しよう。だがお前は僕より弱い、つまり僕には勝てない。分かるだろう」時彦の言葉に舞は微笑んみ、「確かに私は弱い。でもみすみす負けを認めるような脆弱な心は持ち合わせていない」舞もとい舞久は死んだ父に昔教えてもらったことがある。
《人が負けを認める時は誇りを汚すことだ。だから、どれだけ傷を負っても誇りを胸に戦え》剣道をしていた父の教えだ。
舞久は今でもその教えを守っている。だから、
「俺は！」　剣を構え、イメージする。さっきの時彦の射撃した弾にかけた移動魔法を速く、素早く動く自分を
「誇りを胸に戦い続ける！」舞の言葉に「な…！？」時彦が怯んでいる間に

「あなたの移動魔法、参考にさせていただきましたわ」
舞は瞬時に時彦の後ろに周り、刀を斬り付けた。
だが
キンッ
「な…」「防御魔法を展開した。少し驚いたが、無陣法で魔法を使える僕には効かない」
時彦は舞に向け射撃する。「ぐっ　、くそ」
舞は血を出しながら倒れ伏す。
「子無舞か…何者なんだ。さっきの男勝りな言葉も何かあるな」時彦が戦闘の余韻に浸っている。静かになった闘技場まで今まできずかなかった野次馬の声が響き渡っていた。

決意と不安（前書き）

お読みください

決意と不安

目が覚めたら保健室にいた。もう外は暗闇に包まれている。闘技場で戦っていたのは昼だからおよそ6時間ぐらい寝ていたことになる。体の傷は治っている。回復魔法で治癒したのだろうと俺が状況整理していると『舞、もう大丈夫？』と守が話してきた。

「ああ、大丈夫だ。」

と俺が言うと、『そう、ならいいよ』と安心しながら『でも！舞？あなた男言葉で叫んだでしょ！』

「感情が高ぶったんだよ。次からは気をつける」確かにあの時はちょっとヤバかったな……『あのさ舞さ、あの時お父さんのこと思い出してたでしょ』「ん…はあ…なんでも見えるんだな…確かにあの時父さんの言葉を思い出した。もう今はいないけど…」『凄く恐かったけど優しい人だったね…』「ああ…」と切ないムードが漂っている時

カーテンが開かれ

「おっつ～～～～♪やっと起きたね」と社が子供のような無垢な笑顔で言って来たその後俺の横にある椅子に座った。「いろいろ聞きたい事があるんだけど、今はひとまずホテルに行こう。そこが生徒達が暮らす寮だから」と言い終わった後椅子から立ち俺が立つのを促す。「早く行こ　私達同じ部屋だから」「えっそうなの？」「うん、まあ4人部屋で空理と夜音もいるから、皆待ってるよ！」と舞の手を引きながら、ホテルに向かった。

――――――――

ホテル

舞が泊まる部屋は１５１７号室

部屋に入るとまず女子独特の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。社に背中を押され入るとパリのホテルのようなデザインをしている部屋が広がっている。広さは教室ぐらいある。ベッドが４つあり、画面の大きい液晶テレビが設置されている。その他にシャワー室　キッチン　と最低限の設備がある。

ベッドには空理と夜音が乗っていて、こちらにきずいたのか寄って来て

「お疲れ様です。大丈夫でしたか？」「うん、大丈夫よ！」と空理が聞いてきたので軽く応対した。

「しかし、神東は女子にも容赦ないな」と夜音が同情して言ったが

「ううん、手加減はしてたと思う」俺が戦ってたんだ。あいつが手加減してたのなんてすぐに分かる。「私、もっと強くならなきゃ」俺が決意した時「魔法教えてあげてもいいよ！」と社が少ない胸を張りながら言う。確か社はＡＣＥランクだ。全然強く見えないというか小さいから子供にしか見えない

「今変なこと考えたでしょ」と社が頬を膨らまして言う。「ううん、ただやっぱり頼りになるな、社は～と思ってね」と舞が言い「でしょ！私は頼りがいのあるお姉さんなのだ」と社がご満悦にいうが皆

「それはない」と思っている。

だが社に教えてもらった方が授業より効率がいい。

「それでいつから「その前に！」と社が叫ぶ。

「私、さっき舞に聞きたい事があるって言ったよね？」「うん、確かに」

「あのさ私が聞きたいのは～」と社がドアの方にいき鍵をかける。

俺はいやな予感しかしなかった。そして、案の定予想は当たった。

「舞は～男だよね？」

社は奇妙に笑い、ゆっくりと近づいてきた。

子無舞の正体（前書き）

お読みください

子無舞の正体

俺は呆然とした。
がすぐに弁明する。
「男って何その冗談？私は胸もある、完璧な女よ！」「嘘だね」社は一歩も譲る気は無いみたいだ。
俺は社を説得するため
空理と夜音に助けを求める「空理も夜音も何か言って！」だが「それは無理だ。ああなっては論破するしか方法がない」と断られる。
くそっどうする！おい、守！
『もう終わった、もう終わった、もう終わった』
壊れてるな…

仕方ない、論破するか。
「私がなんで男だと思ったの？」まずは根拠を聞かないとな。
「闘技場での男言葉」
やっぱりな…「それだけで私が男だとでも思ったの？」社はベッドに座り、「そんな分けないじゃん」と言った。
「これからは話しが長くなるんだけど～」と言い社の論破が始まる。

「まず私は観客席を後にして、すぐに神東君の所に行った。そして、あなたのことどう思うって聞いたら「怪しすぎる。だから少し探ろうと思う。鳴神、お前来るか？」って言われたから行く～て言ったの。てっきり図書館とかいくのかな～って思ったらなんと地下の指令部に来たんだけど、指令部は職員と各クラス代表そして、生徒会長しか入れない。そのまま神東君が入ったから、私が外で待ってたら、一枚の紙を持って出てきてさ神東君に聞いたら「これを見てくれ」って言われたから見たら、名前がいっぱい書かれてた。そしたら赤い文字で書かれた名前があった。その紙は1日に神軍に招集さ

れた人達の名前が記されたもので、赤い文字は、まだ招集されていないという証拠、指令部でも話題になってるって神東が言ってたわ。そしてその赤字で書かれた名前は、子無舞久」「あ…」と空理が俺を見る。

「そして、神東君が推理したわ。「まず僕からの見解を言おう。子無舞は融合した結果、形成された人間だ。通常、融合は同じ能力値の者達が成功できる魔法だ。だがそれでも双方の魔法技術が相当なものではなかったら成功率は低下する。この子無舞久は、女と融合したが同等の能力値ではなかったため体は女になり、おそらく、精神は完全に子無が乗っ取っている。今日の朝からだが、子無の一人称はわたくしから私(わたし)に変わっている。多分、まだ女に馴れていないのだろうな。つまり、子無舞は、子無舞久と謎の女の融合体だ」とね。どう子無舞、いや子無舞久君。」

全問正解だ。というか神東はコナンか。頭きれすぎだろ。

『もう言っていいよ。本当の事』…分かった。

守が覚悟して、俺も決意する。そして、

「そうだ。俺は子無舞久だ。そして、俺の中にいるのが神瀬川守だ」と告白した

「嘘…本当?」と空理が聞こえ「ああ、本当だ。」

と受け応え、「興味深いな」と夜音は手をワナワナ動かしながら言った。

「素直に答えてくれるとは思わなかったな〜」

「お前相手には隠せないと思ったんだ」と舞久は頭を掻きながら言った。

すると、『一つ聞いて欲しいことがあるんだけど、神軍から抜け出した人間がセミナリオにいて良いのか聞いて』と言われ舞久が

「もし神軍から抜け出した人間がセミナリオにいたらどうなる」その質問に社は少し間を開け「過去に例がないけど、大丈夫よ。ちゃんと保護してくれるから安心して」と社は俺じゃない人に語り掛けるように優しく答えた。

『よかった。なら安心だよ』そうか、守はこのことが心配で、ずっと、ばれないないようにしてくれと言っていたのか。

「ふあ～っ、なんか眠くなってきたな」欠伸しながら時計を見ると23時になっていた。「風呂に入るか」と言ったが「大浴場はもうとっくに閉まってる」と夜音が言った。

そうなると部屋に設備されているシャワー室を使うことになる。

「じゃあシャワー室で…」と舞久が言うと「でも、舞はどうするの、シャワーを浴びるとなると、その…」と空理が口籠もる。

空理が何を言いたいのかはよく分かる。多分、他の2人も分かっている。

俺が悩んでいると

社がとんでもないことを言い出した。

「皆で入ろうよ」と、

そして、一緒に入ることになったが俺だけは目隠しと口止めの魔法（拘束魔法）を掛けられた。

なぜ俺の耳にも拘束魔法を掛けないのかは知らないがおかげでいい気分だ。

『変態がいるよ！ここに変態がいるよ』ちょっお前、変態じゃないぞ、俺は理性という魔法を掛けている。円周率を数えてな。

円周率を数えているうちに俺の体は洗い終え、先に風呂から上がった。
円周率を覚えていて良かったと思いながら、ベッドに横たわり、そのまま眠ってしまった。

社　夜音　空理も風呂から上がり、寝る準備をした。

「もう舞は寝てしまったな」といいながら布団を掛ける。「女の子のこと教えてあげないとね」と空理が微笑みながら言った。
「まあ明日も頑張ろう！」と社が言い、眠りに落ちた

生徒会長との対面（前書き）

投稿が遅れました。

生徒会長との対面

翌朝、目が覚めると視界に社の満面の笑みが視界に入った。そして、社が「かわゆい顔して寝てたね～だから一緒に寝てもうた～」と抱きついてきた。「ちょっとおいやめろ！」と舞久が頬を赤く染めながら解こうとしたが社は離れない。
どうしたらいいか考えていたら、「舞、社ちゃん早く朝食食べに行こ！」と空理が少し怒りながら言って来たので素直に食べに行く準備をした。
どうやら、俺が起きるのが遅くて、社が起こしに来たが社が戻って来ないから空理が来たみたいだ。

その後制服に着替え、社達とエレベーターに乗り、最上階の食堂に行く。エレベーターは全面透明ガラスでできている。そのため、学校の風景が一望できる。俺と神東が戦った闘技場や青いドームの訓練場と最上階に行くにつれ、建物は小さくなる。一応説明しておくと最上階は５０階ある。相当高い。
風景を眺めているとずっと向こうに海が見えた。俺は疑問に思ったがエレベーターが最上階に着いたようだ。
エレベーターから降りると生徒達がちらほらいた。来るのが早かったようだ。

食券を注文する。社、空理、夜音はそれぞれサンドイッチを注文する。俺は和風定食だ。そして、カウンターで受け取り、６人テーブルに座る。
「なんで、３人共サンドイッチなんだ？」「今日はサンドイッチの日だからだ」と夜音が当たり前のように応える。
「周りを見てみろ、全員サンドイッチを食べてるだろ？」「えっ本当？」と周りを見たが誰もサンドイッチを食べていない。

「嘘だ」「てめえ…」
ちょっと信じちゃったじゃねえか…

「よう、座るぜ！」
「失礼、座らしてもらう」滝人と時彦が一緒に食べ始めた。
「あの…それは」
「ん…なんだよ？サンドイッチ食ってるだけだろ」
俺は滝人に、「……今日は何の日？」と聞いたら「サンドイッチの日だろ。当たり前だ」
滝人は平然と応えた。
マジか。こいつら…

「ところで、子無は後で一緒に来い。行くところがある」と時彦が朝カレーを食いながら言った。
「分かったよ。まあ何かしらのイベントは起こると思ってたからな」
「それでどこにいくの？」と社が聞き、それに対し「生徒会長室だ…」と時彦が俺を同情の眼差しで見る。社も「うわ～最悪だ」と言う。
いや予感しかしないな…

朝食を食べ終わり、俺と時彦は生徒会室に向かった。
生徒会室に向かう中、俺は少し警戒していた。もしかしたら昨日みたいに戦うことになると思ったからだ。だが、「安心しろ、生徒会長と戦闘になることはまずない、彼女はむやみに戦うことはしないからな」
と時彦は俺の気持ちを見透かしたように言う。
「そうか、良かったよ」
「そんなことより男言葉で話して良いのか、通りすがりに聞こえたらどうする？」「別に、臨機応変に対応するさ」「そうか……お、着いたな」

「これが生徒会室？」
それは、どこからどう見ても魔女の家の扉だ。取っ手には髑髏が着いていて、少しというかもの凄く不気味だ。
「さて、僕は教室に行く。後は生徒会長が案内するだろう…幸運を祈る」
「ちょっおま…行っちまった」時彦は移動魔法で一瞬で消えた。
「どんだけいやなんだよ、生徒会長嫌われすぎだろ」
だが、生徒会長には会わないといけない。まあ女性らしいからな、優しいだろ。
コンコン
「1年の子無舞です」
「どうぞ、入って」
お、女らしい優しい声だ。「分かりました。失礼します」高校の面接のように堅苦しい口調で受け答えする
生徒会室に入り、生徒会長の姿が視界に入るはず、だった。
ベチャッ
顔に物凄い勢いで何かが当たる。仄かに甘い匂いがする。これはパイだ。
よくお笑い番組でやってるあれ。
俺が放心状態になっていると前から「やった！顔面ジャストミートだ」と歓喜の声が聞こえる。
「なんで、こうなるの？」俺は立ち尽くし、無意識に呟いた。

生徒会長との対面（後書き）

生徒会長、登場

生徒会長との対面２

あれ？なんだろ…
無性に腹立つな、
「ほら！立ち止まってないで中に入って来て！」
「いや、あのパイのせいで前が見えないので何か拭うものないですか？」
「ほら！早く入って来て！」「あのだから拭うものを…」「早く入って来て！」俺のフラストレーションは頂点に達した。
「前が見えねえから、入れねえんだよ！！ボケが！」俺は前にいるであろう女に蹴りを放った。だが人間を蹴った感触がなかった、そのかわり　カチッ　何かのスイッチを蹴ってしまった。それと同時に　ザバア～
天井から大量の水が降ってきた。
「キャハハハハハ、爆笑！面白すぎ！」
萎えた…テンションが地底まで打だ下がりだ。俺、明日から地底人として暮らすと言われた時のテンションの低さだ。言われたことないけど。

水のおかげでパイが流れ落ちる。視界が開け、目の前を確認するとそこには、髪の色が紺色の癖毛、到底生徒会長には見えない佇まいだが服装が特殊すぎる。
「メイド服だと…しかも完璧な絶対領域だ」
確かに生徒会長のスタイルはかなりの物だ。締まるところは締まり出るところは出ている。そして、絶対領域（ガーターからスカートの間）はもしオタクが見たら、崇めるぐらいのレベルだ。
「フフ、君が噂の融合体だね！リアクションが面白すぎ！これは有望な人材だわ」「あの…融合体って言うのはちょっと…」「ん、そうね、今は子無舞ちゃんだもんね！」と会長との初会話を果たす、

なんで皆生徒室を避けるのか分かった気がする。
「あっそうだ！自己紹介がまだだった、私の名前は代々神照（よよがみてる）、能力値はＡＣＥ、そして生徒会会長です」
いつも思うが苗字に神が着いてたら凄いカッコいい感じになるな。かといって子無とか！なんだよ、どうやったらこんな苗字が生まれんだよ！
「ハックチュン　あ～寒い　代々神会長、着替えとかないですか？」暦では夏の季節であり、当然部屋にはクーラーがついている。水びたしになった（代々神会長のせい）舞久にとって悪環境でしかない。
「可愛いくしゃみするね、ますます男のあなたを見てみたくなったわ…はい着替えよ！」舞久は着替えを受け取るがあからさまに嫌な顔をする。「あの…これメイド服じゃないですか？制服の着替えは…」「この部屋にはメイド服しかないよ」「ですよね～ってメイド服しかないんですか？」
すると、照は怪訝に笑い
「ごめんね！制服の着替えはないのよ」とわざと芝居がかった風に言った。
「もしかしてあなた、俺にメイド服を着させるために」「ち、違うよ！違うからね！」嘘が下手すぎる。動揺しすぎだし…まあそこが彼女の良いところだろう。「分かりました。着させていただきます」
「やった～！」舞久は照の歓喜の声を背に浴びながら、試着室に入った。

５分後　メイド服に着替え終わる。鏡の前に立ってみると、小悪魔的な黒のフリフリが特徴のメイド服を着た少女が立っている。
「かわいいな…」
鏡に映った顔が笑っている。頬を少し赤らめて
「着替えた？早く出てきてよ！」「はい、ただいま」舞久はカーテンを開けた。「お～わ～、可愛いよ！よく似合ってるわ！やはり有

望な人材だわ！」「あ～そうだな、よく似合っている。」「そうですか…えっ
なんで神野先生が？」
舞久は少し戸惑い、急に赤面した。
「ははっまあそう恥ずかしがるな、まあ私がここに来たのはお前達と一緒に指令部に行くためだ」
神野がそう言うと、扉を開いた。
「何をしに行くんですか？」舞久の質問に神野が
「お前の中にいる女と会話しに行く」

「え？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5162z/

セミナリオ

2011年12月20日22時54分発行